

俺が転生してアメイジ
ングエクシアで00の世
界を駆け巡るお話

9割のサド1割のマゾ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

藤咲久遠の人生はとても短かつた

しかし、彼は第二の人生を歩むチャンスをもらつた
そして彼はアメイジングエクシアと共に〇〇の世界を駆け巡る
—異端者による革新が、今始まる—

2015/01/14

非ログインユーザーさんからも感想を受け付けます

目

次

介入

会敵

ltreマイオス

12 6 1

介入

ん・・・あれ、なんで俺が真っ白な空間にいるんだ?
さつきまで薄暗い自室にいたはずだぞ

「篠崎久遠、おまえさん死んだぞい」

はあ・・・?

なんで俺が死ぬんだよ、説明しろよ

「君が寝た32分17秒後、首都圏で発生した大震災があつてなあ。その揺れで家屋が倒れたその下敷きになり軽くミンチ状態で即死だつたぞい」

まじかよ、俺色々とやりたいことたくさんあつたのに・・・

「そんな可哀想なお前さんにもう一度人生を歩むチャンスをやろう」

それって・・・転生ってやつか?

「如何にも、好きな世界はあるかい?」

ガンダムOO、それ一択だ

「うむ、その世界を望むか。ついでの特典は3つまでじゃ」

俺が純粋種のイノベイターになること。『ガンダムビルドファイターズ』っていう作

品中に登場するとガンダムアメイジングエクシアをトランザムブースター付きで実際のモビルスーツにして俺の専用機とすること。あと生まれ変わった俺がイオリア・シユヘンベルグの隠し子つていうことにしておいてくれ

「名前はどうするかい？」

前世で篠崎久遠つて名前だつたから・・・安直に久遠・シユヘンベルグで良い「容姿等はそのままでいいかい？」

大丈夫だ、問題ない

「じゃあ今から転生せよ。せいぜい死なないように頑張る事じや」

そして俺は白い閃光になりその場所から消え失せた

目を覚ますと俺は宇宙空間に浮遊するデブリの上にパイロットスーツとヘルメットを着て立っていた

そして視線を上に向ける、そこにそれはあつた

「おお・・・デカイな」

俺の目の前にはトランザムブースターを装備したアメイジングエクシアが俺の登場を待ちわびるかのように膝立ちしていた

俺はパイロットスーツに備え付けられている推進器具をもちいてアメイジングエクシアに接近しそのコクピットに乗り込む

「これは完成度が高い・・・つて本物なんだけどな」

俺がシートに座ったことにより計器類が作動したようでパネルが光る
その景気を調べていると現在の西暦は2312年ということがわかつた、ちょうどセカンドシーズンが開始する時代だ

それはさておき俺はコクピットの内部をくまなく調べる

操縦桿などの機械類を操作し動作確認をする、そのとき変なスイッチを押したことでG N ドライヴが起動した

「ここ」で起動するのか、なるほどな」

俺は操縦桿を握りしめ自分を鼓舞させるためにこういった

「アメジングエクシア、久遠・シユヘンベルグ。作戦行動に移る！」

操縦桿を前に押し出す、するとトランザムブースターからあふれんばかりの粒子が吹き出し機体を前進させる

しばらく進むとモニターの正面に赤いビームと桃色のビームが飛び交う宙域があつた

「あれは近いな、一氣に行く。トランザム始動」

T R A N S | A M

俺の声に呼応し機体が深紅を纏うように紅く輝く

そして3倍近くのスピードで機体を前進させ目の前のアヘッドに接敵する

「なつ・・・お前は何者だ!?」

「名乗る程の者では無い。取り敢えずお前達にはここで引いてもらおうか!」

俺はコクピットを切り裂かないよう右手のアメイジングGNソードを左上から右下に振り下ろし戦闘不能にした

「ぬわっ!?」

「貴様あ!!」

激昂した赤いジンクスがランスを片手に俺を討たんと迫り来るがそれがアメイジングエクシアの機体に触ることはなかつた

その前にアメイジングGNブレイドがランスもろとも腕を切り飛ばしたからだ

「甘い！」

そしてとどめに四肢を落としそれを手で押しのける

ひと段落したところでエクシアとの通信回線を開き話しかける

「大丈夫か？刹那・F・セイエイ」

「お前は・・・なぜ俺のエクシアを!?」

「これはエクシアの二番機だ、第二世代のアストレアの予備パーツを起点に作られてい

る」

「だがオリジナルのGNドライブを・・・どこで調達した?」

「これは我が家に秘蔵されていた後期製造試験型のドライブだ。製造も秘匿にされていたし君たちが知る由はなかつただろう。それよりも君のお仲間が来たようだぞ。」

視線を横にずらすとトレミーとそれから射出されたセラヴィーガンダムの姿がモニターに映る

「君はあそこに行け、私はここでお暇するとしよう。」

「ま・・・まで、お前の名前を教えろ・・・!」

「久遠・シユヘンベルグ、イオリア・シユヘンベルグの末裔だ」

その言葉を残し俺は地球圏へ向うべく機体を地球に向け加速させた

会敵

俺は上空千メートルぐらいの高度を飛行している

小慣れた操作で操縦桿を操作しながら高力ロリービスケットをかじり言葉をつぶやく

「・・・暇だ」

遥々宇宙から地球圏に来たはいいものの何もすることもない
ここ2日ほどそこら辺をフヨフヨ飛んでいるだけの間抜けになりつつある

「つまらないなあ・・・ん、なんだアレは?」

その時、アメイジングエクシアのモニターが何かを捉えた、望遠機能を使つて拡大して見てみるとその姿が鮮明に映つた

「アロウズのジンクス・・・暇つぶしに撃墜するか」

それは編隊を組んで飛行しているアロウズ仕様のジンクスIII 6機だ

アロウズは統一を急ぐあまり反政府組織を虐殺しまくる卑劣極まりない組織、それはまさしく世界の歪みが生み出した負の産物そのものだろう

俺はここでガンダムの存在意義を再び思い出す

イオリア・シユヘンベルグは武力による戦争の根絶を目指しガンダムを作った、それならばガンダムマイスターの役目はその目標に従い兵器を駆逐すること俺はアメイジングGNブレイドを左手に持ちトランザムを発動させるそしてバーニアを吹かし紅い残像を生み出しながら急下降する

「迂断り参上つてなあ！」

「なつ・・・ガンダム!?」

俺は通り魔的な言葉を吐きながら一番手前にいたジンクスの足を切り落とし素早く両腕も切り落とす

「貴様よくもー!!」

俺が攻撃したジンクスは今の姿勢を維持することすらままならなくなり近くにある丘陵の山腹に激突した

これでジンクスはあと残り5機、おそらくトランザムによる超機動を駆使してせいぜい30秒かかるかからないかというところだろう

「お前ら、命だけは助けてやる。機体を失いたくなれば引くことだな」「誰が貴様ごときに！」

ジンクス達は抵抗しようとそれぞれ武器を構える

「どうか、その意気込みは認めてやる」

俺はアメイジングGNソードに取り付けてあるGNビームサーベルを発して手前の敵に飛びかかり袈裟斬りを決める。もちろんコクピットを避けて切つたことで犠牲者は出ないはずだ

「2機目、残機4！」

その刹那にランスをつきたてようとしていたそれを保持する右手ごとアメイジングGNブレイドで切り裂きかかと落としで地上に突き落とす

「3機目……！」

止めに大腿部をビームサーベルで切り胴体を蹴つて山腹に突き落とす

「くつ……化け物！ 来るなあ！！」

恐怖に打ちひしがれたのかランスの副砲を乱射する奴もいたが四肢を瞬時に切り裂き蹴り飛ばす

「4……残機2！」

残りはビームサーベルを構えて突っ込もうとする機体とランスを盾に突っ込む機体だけだ

トランザムブースターのスラスターを全開で吹かせ瞬く間にジンクスの懷に飛び込

む

「甘い！」

ジンクスはカウンターバーニアを吹かし距離を取ろうとするがそれよりも先にアメリカングエクシアのGNビームサーベルの逆襲姿切りの餌食になつた

そして最後の機体は勝ち目がないと判断したのか逃走したようだ

「なんだ、こんなものか」

今回わかつたが正直一般兵は雑魚すぎる

もしかしたらトランザムを使用せずとも余裕で戦えたかもしれない
俺と対等に戦えるとすればミスター・ブシドーやリボンズ・アルマーク、それに刹那・F・セイエイぐらいだろう

「帰るか、アジトに」

トランザムを解除し大気圏を脱するためにブースターを吹かす

「逢いたかったぞ、少年!!」

その時、アヘッドの近接格闘特化仕様『サキガケ』が俺に接近してくる

サキガケはミスター・ブシドー専用機であり、そして彼の正体はガンダムを溺愛するあまり憎しみを抱いたグラハム・エーカーだ

おそらく監視衛星のデータをもとに来たように見えるがなぜか刹那・F・セイエイと間違えられている

理由は単純、俺がエクシア使つてゐるからだ

「すごい人違ひなんすけどお！」

「問答無用、スキありい!!」

俺は迫るビームサーベルの刃をかろうじて避ける
ブシドーのその太刀筋は激しくも纖細、正に芸術と言える・・・いかんいかん、感傷
に浸つてゐる場合ではない

「調子狂うし非常に面倒だ、速攻で撃退する」

モニターに表示されている粒子充填率は56%、トランザムは約2分持つ

俺は躊躇いも無くトランザムを始動、再びエクシアに紅蓮を纏わせる
それを見たブシドーは迷うことなくビームサーベルを振りかぶるがその両腕を二の
腕の部分から切り落とす

そしてアヘッドの眼前にアメイジングGNブレイドの切つ先を突きつける

「命が欲しけりや逃げな、あと俺はお前の追い求めてる男じやない」

「何・・・では貴様は何者だ？」

「今は名乗れない、だがいつかまた会う時があれば・・・剣で語ろう」

「ほう、楽しみにしているぞ。もう一人の少年よ」

ブシドーは踵を返し海の向こうへ消えた

そして粒子残量が底をつけトランザムが解除される

「また因縁を増やした気がするぞ・・・」

俺は頭を悩ませながらゆつくりと宇宙へ向け飛ぶ

一方、地上で宇宙に飛ぶアメイジングエクシアを見上げるMSがいた
赤色に染められた試作発展型^{アライ}1ガンダムのパイロットはそれを見てつぶやく
「あれは・・・なんだ?」

その人物はリボンズ・アルマークという名前のイノベイド

ヴェーダを掌握し世界を思うがままにするという悪しき野望を画策するガンダムマ
イスターだ

だが彼にもあれの正体はわからなかつた

「僕が知らないガンダム・・・厄介だ」

あれは自分の計画を狂わすイレギュラーだ

不確定因子は排除しなければならない、そう思うリボンズだつた

プトレマイオス

俺は今アメイジングエクシアを駆り成層圏を抜け宇宙圏へ進行している

「そろそろ座標的に衛星軌道超えそうだな」

現在の粒子充填率は全体で98%、機体状況も良好で目立った破損はない
それを確認すると俺はエナジードリンクを一気飲みする

「心が落ち着く、至福のひと時とはまさにこのこと・・・」

その時、機影を捕捉したときのアラートとなる

「なんだよこんなときに・・・って、プトレマイオスか？」

捕捉したのはソレスター・ビーリングの所有するガンダムのマザーシップであるプトレマイオス

だがGNフィールドを張り地球圏へ向かおうとしている様から武力介入を開始する
ものと思われる

「行つてみるか・・・」

俺はアメイジングエクシアの向きを180度回転させGNフィールドを張りつつ再び大気圏内に突入する

数分後、俺はあることに気がついた

「いい加減止まらないとまずいんじゃないのか？」

铂トレマイオスは機首は海の方角を向き減速せず重力加速度に身を任せどんどん加速していく

いくらGNフィールドを張つているとはいえ海面に激突すれば乗組員が危険にさらされる、普通ならこんなことは絶対にしない

「となると作戦か……そういえばそんなことやつてたな」

と言いつつ視線を横に向ける、視線の端に映るソレスタルビーアイジングのガンダムチームは铂トレマイオスと別方向から海沿いに建てられた陸軍基地に向け進んでいるおそらく船を囮にしガンダムチームによる迅速な襲撃が目的だろう

「じゃあひと暴れしますか！」

操縦桿をいっぱいに押しアメイジングエクシアをさらに前進させる、そして視線の先にある陸軍基地の一本道に着陸しそこに居合わせた黄土色のティエレン達の関節部めがけ腕部のGNバルカンの弾丸をぶつける

ティエレンは当然立つことすらままならなくなりその場に倒れこむ

「さて、増援が来る前に制圧しますか」

その時地震に酷似した大地の激しい振動が発生した

突然のことに驚き後ろを振り向いた

その瞬間、俺は急に津波に飲み込まれ流された

「のわっ!?」

そしてからビルに激突、コクピットも激しくシェイクされる

「これが真の狙いかよ、津波で大規模な攻撃だと・・・それ以外にもありそうだ」

俺は潮の引きつつある基地の地面に立つ、その付近は視界が見えなくなるほど濃い濃霧に覆われていた

「粒子ビーム成形に障害が発生・・・」

そこでふと思い出した、GN粒子を用いたビーム兵器は周囲の環境により性能が劣化しやすい、それは大気圏内や周囲の湿度が高まつた時などに頻繁に起ころる

「ビーム兵器は使わないほうがいいか、だつたら」

アメイジングGNソードの刃を起こす、そして接近するティエレンの脚部を切り退ける

「なんだ、アロウズもお出ましか」

上空にいる輸送艦から次々と赤く塗られたジンクスが編隊を組んで飛来する

「さつきの二の舞にしてやるぜえ!!」

俺はジンクスの群れに真っ向から突撃し過ぎ去り様に航行不能にさせ海に落としま

くる

そしてガンダムチームが離脱したのを確認すると戦闘を中止しブトレマイオスについていく

今日も世界は混沌也